

山に雪光る

小川未明

青空文庫

いろいろの店みせにまじって、一けんふでやの筆屋がありました。おじいさんが、店みせ先さきにすわって太い筆ふとや、細い筆ほそをつくっていました。でき上あがった筆ふでは、他たへおろしうりにうるのもあれば、また自分じぶんの店みせにおいて、お客きやくへうるのもありました。昔むかしとちがい、このごろは、鉛筆えんぴつや万年筆まんねんひつをつかうことが多く、筆ふでをつかうことはすくなかったのです。しかし、大きな字おおを書かいたり、お習しゅうじ字じをしたりするときは、筆ふでをつかうのでした。

武男たけおは、よくおじいさんのところへ遊あそびにきて、お仕事しごとをなさるそばで、おじいさんから、お話はなしをきくのを楽したのしみとしました。「おじいさん、あの字じは、だれが書かいたの。」と、頭あたまの上うへにかか

っている額をさしました。

「ああ、あれはここへみえる、書家の方が、お書きなされたのだ。
」

「うまく、書けているの。」

「みなさんが、おほめなさる。山高水長、やまたかく、みず

ながし、といつてもよい。」

「おじいさんに、書いてくださったの。」

「そうだ、ここにある、この筆で、お書きになったのだ。私のつくった筆が、たいそう書きよいと喜ばれてな、一枚くださったのだよ。」

おじいさんは、箱の中から、一本太い筆をとりだして、いいま

した。それは、白い毛の筆でありました。

「ぼく、お習字のとき、つかう筆とよくにているな。」と、武男は、目をまるくしました。

「武坊のもよい筆だが、これとはちがっている。」と、おじいさんは、笑われました。

「ぼくのも白いね。この筆の毛は、やはり羊でない。」
 「そう、羊の毛だ。」

武男は、筆をつかったあとで、かなだらいに、水をいれて洗うと、もくもくと、ちようど汽車の煙のように、まつ黒い墨を、筆からはき出します。そして、そのあとの毛は、清らかな水をふくんで、美しい緑色に見えるのでした。

「おじいさん、どの毛けでつくった筆ふでが、いちばんよいのですか。」
と、武男たけおは、ききました。

「いちがいにいえぬが、細筆ほそふでなどは、たぬきの毛けだろうな。」

「どうやって、たぬきをつかまえるの。」

「たぬきか。おとしや、わなでつかまえたり、また、子飼こがいにし
て育てそだたりするのだ。」

「山やまへいけば、たくさん、獣物けものがすんでいるのだね。」と、武男たけお
は、いいました。

昔むかしは、このあたりでさえ、いたちが出たでものだ。」

おじいさんも、子供こどもの時分じぶんから、町まちに育てそだて、野生やせいの動物どうぶつを
見みる機会きかいは、少すくなかつたのです。

もう火ばちに火のほしい、ある日のことでした。武男が、おじ
 さんのところへいくと秋の薬売りが、額の字を見ながら、お
 じさんと話をしていました。いつしか、字の話から、山の話に
 なったらしいのです。

「なにしろ、中央山脈の中でも、黒姫は、険阻といわれ
 まして、六、七月ごろまで、雪があります。やっと、草や木の芽
 が出はじめると、薬になるのばかり百種ほどつんで、ねり合わせ
 たのが、この薬ですから、腹痛や、食あたりなどによくききま
 す。これをおいてまいりましょう。」と、薬売りは、袋にはい
 ったのを、おじさんの前へおきました。

おじいさんは、その袋を手にとって、さもなつかしそうに、な

がめながら、

「それから、さつきの話の筆草というのを、こんどきなさるとき、わすれずに、見せてもらえまいかな。」といいました。

「来年の夏は、方々の山へまいります。私が見つけなければ、おちおうた行者に頼んで、どうかして、手に入れてまいります。」

「ふしぎですな、自然にそんな草があるとは。」

「てんぐや、隠者が、それで字を書いたといいます。」

「私は、この年で、もう高い山へ上れないから、たのしみに、待つていますよ。」と、おじいさんは、頼んでいました。

薬屋は、紺もめんの、大きなふろしきで四角な箱をつつみ、

それを背中へ負い、足にきやはんをかけ、わらじばきの姿で、立ち去りました。武男は、しばらく、その後ろ姿を見送っていました。

「筆草って、草があるの。」

「高い山へ、薬草をさがしにいくと、まだ人の知らない、ふしぎな草があるという話だ。」

「あの薬屋さんは、これからどこへいくの。」

「まだ方々を歩いて年の暮れに、山国の町へ帰るといった。」
武男は、その日の夕暮れが、いつもより、美しく、さびしく感じられました。

秋から冬へかけ、空は、青々と晴れていました。町のはずれ

へ出^でて、むこうを見ると、野^のや、森^{もり}をこえて、はるかに山^{やま}々^{やま}の影^{かげ}が、うすくうき上^あがっていました。その中^{なか}の高^{たか}い頂^{いた}には、すでに雪^{ゆき}が、はがねのように光^{ひか}っています。武男^{たけお}は毎日^{まいにち}ここへきて、山^{やま}をながめていました。そして、正^{しょう}月^{がつ}の書^かき初^ぞめには、「山^{やま}に雪^{ゆき}光^かる」と、書^かきました。

よくできたと、学^が校^{っこう}の先^{せん}生^{せい}からも、お父^{とう}さんからも、ほめられました。また、筆^ふ屋^{でや}のおじいさんは、字^じに、たましいがはいっている、たいへんほめてくれました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「心の芽」文寿堂出版株式会社

1948（昭和23）年10月

※表題は底本では、「山《やま》に雪《ゆき》光《ひか》る」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年1月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

山に雪光る

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>